



84歳。熊本県出身。



1936年、祖父の呼び寄せによりリベラルタへ。

父（一男）、母（ハツヨ）、姉、フサエさんを含め4人姉妹で入る。当時9歳。

ブラジルで6ヶ月を過ごし、列車でカチュエラエスペランサへ。

そこから船でリベラルタにはいる。ブラジル滞在中マラリアにかかるが一命は取り留める。

牧場の経営が出来ると聞いて来たのに、騙されたと思った。

着いた当時、「街はどこか」と尋ねたら、「バカな事を言うな」と怒られた。そこが既に街だった。

荒地で牛、馬が放されていて夜は危なくて出られず、昼間も気をつけなければならなかった。

虫もたくさんいた。マリウイ、ブト、エヘネ、ハプタモスなど。今でも跡が残るほどひどかった。

刈りたての草には沢山居て、目に見えない小さいものはそのまま肌に留まり続けるので赤く大きく腫れた。

日本人は当時沢山いた。

ヨコイ、ハノ、グシ等。

こちらに着いて兄弟が2人増えた（マコト、ミサオ）。

当時スペイン語は話せなかったが、日本人がいたのでそれほど困らなかった。

日常会話は日本語だった。

父親が山に行って畑を開墾していった。手には豆がいつもあった。

その後、腸チフスにかかり、15歳の時に父が他界。

その前に当時11歳だった弟も1ヶ月前に他界したばかりだった。

借金もあったので母親と兄弟のみの生活はとても厳しいものだった。

朝6時に起床し、パンを作って売った。

フィデオやチチャも作った。

当時が今までで一番辛かった。

その後母が再婚した。21歳の頃母がお産によって他界。日常会話で日本語を使わなくなっていく。

その後ラパスへ。アキジさんと結婚。4年後再びリベラルタへ。

生地屋（服の仕立て）を始める。

昔に比べてオートバイが増えた。昔は徒歩か自転車で移動していた。ラパスから日本のHONDAが入ってきて徐々に増えていった。

今までに2回日本に帰国。

出身地熊本には帰っていないものの、東京、京都、相模原などを観光した。

現在息子は日本に。

昨年、ご主人（アキジさん）が他界。

ボリビアには妹（ヨシエさん）がコチャバンバに居る。

コチャバンバは過ごしやすい。

もう歳だし、リベラルタが一番暑くて砂埃が多いけど、娘と家族と一緒に暮らせて幸せです。

70歳。沖縄県出身。



1961年、叔母の呼び寄せによりリベラルタに入る。（叔母の夫はペルー下り。この時、既に他界しており、叔母は一人でリベラルタに居た。）

父、母、兄、本人の4人。

当時20歳。

飛行機でリベラルタへ。

空港に着くなり、歩いても、歩いても街が見えてこない。

白いワンピースが汚れ、ハイヒールが泥だらけになったころ、「Plaza(広場)はどこですか」と尋ねたところ「今あなたが居る場所がPlaza(広場)です」と言われた。

周りには牛と草と木しかなかったので、ここがPlaza(広場)だと分からなかった。

始めは帰りたくて仕方なかった。

日本語を話す人が少なく、辛かった。虫が多く、蚊とマリフイには悩まされた。

毎日さされて足が腫れて膿が出た。

その後美容師になる為、ラパスへ免許を取りに行く（2年間）。

ラパスで沢山の日本人と知り合い、日本語を話し、虫に悩まされることも無く、いい気分転換になった。

その後リベラルタに戻り結婚。

子供が2人できた。

父が始めたレストラン「東京」を手伝いつつ、美容師として働く。

また、2世、3世の為に自宅で日本語教室を始める。

簡単な挨拶、物の名前など。

その後10年かけてジャイカボランティアの要請を出し、1988年、念願の日本語教師（ジャイカボランティア）を呼ぶことが出来た。

足掛け10年の結果。

ジャイカからは感謝状も頂いた。

日本人はペルーから渡ってきて勝手に移り住んだ。

その時リベラルタの人々が貧しかった為、日本人を拒む事が無かったので移り住む事が出来た。

始めは日本人についての理解が無く、ねたまれたり、嫌がらせを受けたりしたが、日本への出稼ぎが増えるに連れて、「日本に行けばお金を稼いで帰ってこられる」と次第に親日家が増えていった。

今まで日本への出稼ぎの支援などもしてきた。

リベラルタの中でも田舎に住んでいた住民を出稼ぎに出した事もある。

無償で入国手続きなどの書類の作成を手伝ったりしたにも関わらず、その後偽造のパスポートや戸籍抄本が出回ったりというトラブルもあった。

昔に比べてゴミがとても増えた。

父のレストランを手伝ったのがきっかけで、今は料理屋をしていて、主に日本食を作っている。

焼きそば、おにぎり、寿司など。

そしてたまに昔の常連さんに頼まれると髪を切ることもある。

もう50年リベラルタに住んでいる。

旅行では日本に帰るだろうが、住むことは無いと思う。



毎回、リベラルタ文化センターにて日本祭を開催する時には日本食を販売してくれている。寿司、焼きソバは大変美味しく、毎回午前中に完売するほど評判だ。

73歳。沖縄県出身。

1961年リベラルタに入る。当時23歳。

日本から船に乗りブラジルへ。そこから車でボリビアサンタクルスへ。

ちょうどボリビア独立記念日と重なり、2週間サンタクルスに滞在の後リベラルタへ。

父、母、妹の4人で入った。当時は思っていたのとあまりに違ったのでとても悔しかった。

ゴム景気によって沢山の外国人がやってきた。日本人も例外ではなくその頃500人程の日系人がおり、一番多いところで日本人は600人居た。1980年頃からはゴム景気も下降し、入ってくる外国人も減ってきた。

リベラルタには”沖縄支部”と”鹿児島支部”の日本人会があった。

1985年頃日本からリベラルタ日本人人口調査団が来た。

日本では歯科技工士をしていた。だが自分一人でやっていける仕事を探していた。

そこにちょうど、ボリビアで働かないかという誘いを受けて承諾した。

日本からブラジルに向かって出発する3日前、3か月分の旅の食料を保存しておいた倉庫が火事にあってしまった。ボリビア行きを断念しようとしていた時、ちょうどアメリカのボランティアの船が来て事情を知った彼らが3か月分の食料を援助してくれる事になった。

1970年頃、本格的に農業を開始。野菜づくりに力を入れた。トマト、ピーマン、ニンジン、タマネギなどを作った。家から畑のあるCAMPO（田舎）までは遠く、畑の世話をしない日曜日以外は家に帰ることが出来なかった。初めて耕耘機を持ち込んだ。

24歳で結婚3女3男に恵まれた。現在長男がご本人と同居。農園を引き継いでいる。

三男、三女はコロニア・オキナワに。残りは日本に住んでいる。1991年に一度帰国。

子供達が成長した時、リベラルタに来てよかったと思った。

サンタクルスにいるお孫さんに会いに行くのも今の楽しみの一つ。

ヤスカラ ハヤシダ

41歳。リベラルタ出身。



オズワルド・ハヤシダさんとテレサ・オリベルさんの長女として、1969年9月2日にリベラルタで生まれる。妹3人と弟2人の6人兄弟の一番上。祖父の林田両太郎さんは熊本県あかた群の出身で、1908年にペルーへ渡った後、1910年にリベラルタに定住した。祖父のベナンシア・オヨラさんはリベラルタ出身。ハヤシダ家は祖父の代から数えて100年まえからリベラルタに根を下ろしている。ご主人はベニ県グアヤラメリン出身、現在二人の息子さんがいる。長男、ホルヘアルベルト君（7歳）。次男、ラファエル君（5歳）。

リベラルタで日本語を話せる人はほとんどいない。ヤスカラさんはそんな状況のなかで1987年から日本語を学びはじめ、1989年から教壇に立った。義元富子さんと協力して、ジャイカボランティアの日本語教師をリベラルタに呼んだ。その後、ジャイカボランティアのカウンターパートになった。

当時、リベラルタには10人前後のジャイカボランティアが活動していて、毎日にぎやかだった。リベラルタ病院の裏手の畑に、みんなで野菜をつくったりした。日本人フェアも開催した。

1991年には国際交流基金の制度を利用して、日本へ留学した。初めて日本に渡った直後の3ヶ月が、一番大変でつらかった。そのとき、国際交流基金で派遣された研修生は、ブラジル、パラグアイ、メキシコ、中国、フィリピン、インドネシア、タイ、ネパールなどから派遣された経験豊かな日本語教師達であった。自分以外は、みんな日本語が流暢で、日本語の教え方も上手だった。しかしヤスカラさんは、毎日一生懸命勉強することで、研修クラスの先生からも信頼してもらい、すごく日本語が上達した。10ヶ月の研修の後、他国からの研修生にも引けをとらないぐらいまでになり、初めて体系的に日本語を学ぶことができたという。1995年には国際交流基金の日本語能力試験3級を取得した。

2度目の日本は、1998年から1年3ヶ月間、東京農業大学への留学だった。森林研究室に所属した。代々木公園の中の宿泊所に滞在していたため、週末は歩いて新宿や原宿に遊びに行った。夏休みなどを利用して、北海道、京都、大阪、神戸などにも足を運んだ。また、森林実習のために、沖縄の宮古島で2週間の研修を受けた。リベラルタのジャイカボランティアOB達が、8月6日に、ヤスカラさんのために横浜でイベントを開催してくれた。このときは本当に楽しかった。ジャイカボランティアは、本当によくしてくれた。今でも交流は続いている。

日本を去るとき、大学の先生、親戚の方々、友人達から、「なぜ、あなたは日本語を話せて、このまま日本に住むこともできるのに、リベラルタに帰るの？」と何度も聞かれた。実際に、クラスメイトの友達も、そのまま日本に定住するか、欧米などに移住したものもいる。

日本が大好き、日本語も、文化も人々も、全て。でも、ボリビアにはやるべきことがいっぱいある。日本で見たこと、経験したことをボリビアでやってみたかった。

専門は森林学。ボリビアに帰国後、国立ベニ工科大学の森林学科を卒業した。母校とオランダの大学が主導する森林調査プロジェクト「PROMAD」のメンバーに加わった。その後、木材、栗を扱う会社に5年間在籍し、パンド県のコビハで働いた。

ヤスカラさんはボリビアでは数少ない日系3世の日本語教師だ。リベラルタのボリビア日本文化センター内の日本語教室で、10年以上も教壇に立っていた経験を持つ。2011年、彼女は再び教壇に立っている。リベラルタでは現在、日本語を学びたいという大人が多い。彼らのための授業を週5日で行っている。

43歳。沖縄県出身。



那覇市在住の頃、友人であるペルー出身の日系家族と共にボランティアグループに参加していたときに、偶然何かで「リベラルタの沖縄出身日系人が、沖縄のことをしりたがっている。」という記事を見た。

それなら自分も役にたてるかもしれないと思った。

これがリベラルタを知るきっかけだった。

ボランティア活動を通して知り合ったボリビア人が帰国したのを機に、自身もボリビアを初めて訪れた。

その後、日本語教育の勉強をしたのち、2004年から2006年にかけて、日系社会青年ボランティアとしてラパス日本語学校の日本語教師となった。

ラパスでの2年間で初めての教師経験だった。

この間、初めてボリビア北部のリベラルタを訪れる機会があった。

2年間のボランティア活動のあと、荷物をボリビアに置いたまま、日本へ一時帰国した。

ボリビアに戻ったあと、サンタクルス日本語学校で7ヶ月間働いた。

その後、サンタクルスで購入した自家用車で3日間かけて、リベラルタへ。
ボリビア北部、グアヤラメリンの日系社会にはボランティアが入ったことがなかった。
グアヤラメリンとリベラルタを行き来する生活が約2年続いた。

リベラルタのジャイカボランティア、またグアヤラメリン、リベラルタの日系人と協力して、ローカルテレビ『Hola Japon!』という番組制作を行った。

日系人会の存在を知ってもらいたい。

日系人には父祖の地・日本を感じてもらいたい。

非日系社会には周囲に住んでいる日系人に対する理解につなげてもらいたい。

この3つを目標に始めたものだった。そしてその番組は誰が観ても楽しめるように心がけた。

これによって、多少なりとも日系人会や日本文化を知ってもらうことができた。

あの番組はおもしろい！と反響もあった。うれしかった。

他にも、踊りの指導を行い、街のイベントでパレードに日系人会として参加した。

現地で買える食材だけを使って料理教室をした。

焼きそば、オムライス、照り焼き、豚肉の生姜焼き、タコライス。

グアヤラ、リベラルタで大変だと思ったことはないが、グアヤラメリンの住居に強盗が入り、カメラ、パソコン、服などを盗られたときは困った。

それと前後して弟とおじの病気のことを聞かされ、帰国することにした。

テレビ番組も最終回を放送した。2008年のことであった。

帰国してからはしばらくは頭の中が真っ白で、どこで何をすればいいのかわからずにいた。

しばらく沖縄にいたが、日本本土の工場地帯で働こうと決めた。

昔、自分がボリビアから送り出した彼らが、日本でどんな生活をしているのかを知りたかったし、自分も出稼ぎ労働者として働けばそれがいつか何かの形で役立つだろうと考えたから。

再び南米のフィールドに戻ろうと思ったのは、海外での活動を応援してくれていたおじの死に直面したこと。

現在、ブラジルの地方都市の小規模な日系人会8カ所をまわり、踊りの紹介・指導をしている。

日本文化祭のときには、自分たちの会のはっぴを着て100人の踊り手が舞台発表を行った。

今後も日系人社会に貢献していきたいと考えている。

同じ日系社会といっても、ベニとサンタクルスでは出発点が違う。

サンタクルスの移住地は家族で入っている。

ベニは、独身男性がひとりで出稼ぎ労働者として入って、現地の女性と結婚した人が多い。それで2世の時代から日本語や日本文化が継承されなくなっていった。

戦前・戦後の違いもあり、戦争中は日・ボ両国は敵同士になったので日本に関するものは極力排除するより他なかった。

1世から2世への移行期にボリビアには日本の公館がなく、ペルーの大使館が兼轄していた。このようなこともあって戸籍問題はさらに複雑になってしまった。

日系社会のこれから

まずは、日系人会の存在をしってもらうことからはじめてみたほうがいいと思う。

日本語教育はとても重要だが、それにこだわってしまうと、勉強したい人しか集まらない。

空手教室、折り紙教室、他、どんな人でも来られるようなことから始めるのがいいのではないかな。

直接日本語を教えなくても、日本人がいつもいるというのも大事なことだと思う。

まずみんなが集まって、日本の何かを通して楽しく遊ぶ。

そして「日系人ってなかなかいいものだな」と思ってもらえればいいのではないかなと思う。

リベラルタでの日々が今の自分に一番活かされている。

いつかまた、仲間たちとの再会を心待ちにして。

1914年（大正3年）当時

タイムスリップ・リベラルタ 一九一四年（大正三年）

「当町はアクレ川コビハと共に、ボリビア国に於けるゴム集散の最大市場なり。……街は基盤割に区画せられ、街家は軒を並べ、屋根はトタンに非ざれば瓦葺きなり。或は窈窕たる美人の徘徊するらり。紳士の肥馬に跨り、轡を駢べて弛駆するもあり。服装はシャツ一枚の殺風景なると異なり、少なくとも市街を通行する者は上着の着用なかるべからず。耐えがたき暑さを忍ぶ為めには、アイスクリーム、ラムネあり。各日曜や祭日等には活動写真あり。時としては令嬢方の舞踏などもあり。公園の音楽堂にては、一週二三夜の奏楽あり。水上には十余隻の小蒸気或はモートル艇等の輻輳するあり。……加ふるに同胞三百、その大多数は旧識にして而かも大いに発展しつつあり。……今や日本人は当地に必要欠くべからざるものとなり……」（『聖母河畔の十六年』）

1973年（昭和48年）当時

タイムスリップ・リベラルタ 一九七三年（昭和四八年）

「ヤー、コンニチワー」。人垣の中から日本語が飛び出してきて、四十年輩の日本人が土手を駆け下りて来た。「ヨシモトといます。カヌーが盗まれたんです」と息をはずませながら言った。カヌーが盗まれたので捜しに港へ来ましたら、目の前に日の丸を立てた船が着いたのでびっくりして、懐かしくて……。のちほど、この人は沖縄県出身の義元徳憲さん（四二歳）とわかった。（『アンデスを越えた日本人』）

1999年（平成11年）当時

タイムスリップ・リベラルタ 一九九九年（平成一一年）

日系3世に生まれて

森林学研究員 ヤスカラ・ハヤシダ
(リベラルタ市在住)

私は日本人を祖父に持つ日系3世のボリビア人です。しかし18歳になるまで、日本語や日本文化を学ぶことはありませんでした。父は、日系2世でしたが、父も私もボリビアで生まれ、教育もボリビア人として受けました。

そのような環境で育った私ですが、幼い頃からなんとなく日本語に興味があり、学んでみたいと思っていました。しかし母に反対されて、ボリビア日本文化センターの日本語教室に通うことはできませんでした。18歳になったとき、ようやく日本語教室に通う機会を得ることができました。この日本語教室は強制ではなく、興味のある人が参加する形のものでした。その2年後、私は文化センターの会長から、日本語教室で日本語を教えている青年海外協力隊の先生の助手として生徒の勉強をみてくれないかと頼まれ、教壇に立つことになりました。私は大学へ通いながら、日本語教室の助手を勤めるという二足のわらじをはくことになったのです。それまでは私の生活のなかで日本人と接する機会はありませんでした。しかし接してみると、私のなかで眠っていた何かが目覚めたかのように、日本語をどんどん吸収していきました。また私の周囲の環境もそれを後押しするかのよに、リベラルタにやって来る青年海外協力隊の数も増えていきました。日本語教室では、日本語はもちろん、日本文化についても時おり触れることができました。この仕事をきっかけとして、私は日本のことをたくさん学びました。そればかりではなく、協力隊の方々との個人的な付き合いもありました。いま振り返ってみると、彼らとの付き合いの中からのほうがより多くのものを得たような気がします。

ボリビア人として育った私ですが、もう一つの祖国、つまり祖父の生まれた故郷である日本へ行ってみたいといつも思っていました。1991年に、私は国際交流基金の日本語国際センターの日本語教育研修に選ばれ、日本へ行く夢が実現しました。まさか私が研修生に選ばれるとは思っていませんでした。きっと祖父が天国で応援してくれたのでしょう。

憧れの日本に到着した時、私は人の多さに驚きました。もしかすると私の知らない間に、自分の親戚とすれ違っていたかもしれません。この一度目の訪日では、埼玉県で10カ月間、日本語教育養成の研修を受けました。研修終了後には、再び元のリベラルタでの生活に戻りました。しかしリベラルタでは、日本語を使う場が限られています。私はこのまま日本語を忘れてしまわないかと悲しい気持ちになっていました。そのような時、再び日本へ行くチャンスが訪れたのです。1998年4月から、私は故郷リベラルタの役に立つように、国際協力事業団の研修生として東京農業大学の森林総合科学木材工学研究室で、環境・森林保全と地域開発を学ぶことになったのです。

2度目の日本訪問が決まった時、私は日本文化を学ぶことと研究課題のほかに、自分のルーツを探そうと考えていました。それは祖父方の親戚を探すということです。私が持っている戸籍は古

すぎて自分で探すことは難しく、また祖父の郷里である熊本県は遠いところにあります。そのため福岡県にある友達に相談して、手伝ってもらうことにしました。そのおかげで運良く、祖父方の親戚と連絡をとることができ、会うことになりました。一人で行くのが怖かったため、福岡県の友達について来てもらいました。そのような私の不安をよそに、親戚の皆さんはとても親切にしてくださり、はじめて会ったにもかかわらず、ずいぶん前から知っているような親しみを感じました。家には親戚一同の写真が飾ってありました。その中に祖父の写真を見つけた時、私の中に熱いものがこみ上げてきました。私はそれまで、祖父のことは昔のことなので親戚に忘れられているのではないかと思っていたのです。今まで祖父のことを忘れずにいてくれた親戚の方々への感謝の気持でいっぱいになりました。これからも親戚と連絡をとり続けたいと思います。

ところで私の祖父林田両太郎は、1908年4月7日に、第5回航海船「巖島丸」で横浜港を出発しました。当時、22歳という若さでした。5月21日にペルーのカリヤオ港に到着し、オルヤで車を降りた後、徒歩でチャンチャマヨのナランハル耕地へ向いました。その頃、アマゾン川流域は空前のゴム景気にわき、ペルー移住者の多くはアンデス山脈を超えてボリビアに向いました。しかし日本とボリビアの通商条約締結前であったので、日本政府の保護などはなく、日本人たちは丸裸同然の状態で入国したのです。祖父もその後リベラルタに再移住しました。私は、祖父をはじめとする当時の移住者の方々は大変だったであろうと思いました。今でこそいろいろな情報がありますが、その頃はアンデス山脈を超えてアマゾン川流域に向かうにしても、リベラルタの町についても、何も知らなかったのですから。祖父が再移住したリベラルタは、一時期、700名以上の日本人が住み、日本人社会を形成して町の発展に大きく寄与しました。また祖父は55歳の時、リベラルタ日本人協会の評議員を務めました。

さて、いま日本へ出稼ぎに行っているボリビアの日系人がたくさんいます。約10年前から日系人は日本へ仕事をしに行くことが簡単になりました。リベラルタからも大勢の日系人が日本へ出稼ぎにいきました。私は日本で実際に、出稼ぎにきていた人たちと話をすることができました。彼らの目的は、ボリビアでの生活水準を向上させることでした。しかし彼らは日本に対する知識があまりにも乏しかったため、まるで祖父たちがボリビアへ移住した時のようでした。彼らが4人で一つの狭い部屋を借りて窮屈そうに生活しているのを見て、もし彼らがそのままボリビアに住んでいれば、そのような生活はしなくてもいいのにと驚きました。聞くところによると、もっと大勢で一つの部屋に住んでいる人もいるそうです。お金を稼ぐためとはいえ、彼らのこのような生活をみてやる瀬ない思いをさせられました。彼らは日本の生活に慣れるまで日本人とコミュニケーションがとれず、大変な思いをしたという話を聞きました。このことを考えたとき、出稼ぎには良い面と悪い面があると思いました。良い点はお金を貯めてボリビアに帰り、裕福な生活をできるということです。悪い点は先に述べたことのほかに、家族と離れて寂しい生活をしなければならないということです。彼らも覚悟の上とはいえ、大変であると思いました。お金を稼ぐことは大変なことです。

私は今まで自分の体の中に日本人の血が流れていることは知っていましたが、ボリビア人として生きてきましたし、自分はボリビア人だと思っていました。それに日系人のアイデンティティというものは意識したことがありません。しかし日本での生活を通して、自分が日本的な一面

を持っていることに気がつきました。例えば、ボリビア人は物事を頭で考えずに心で考えて行動しますが、私は一度立ち止まってよく考えてから行動をする方です。また女性はミニスカートや半ズボンで外を歩き回することは恥ずかしいことだと私は考えます。そのようなことはリベラルタにいる時は気づきませんでした。日本で生活をして日本人と触れ合ってみて、自分と似ている部分を感じました。日本滞在中も同じ研修生のブラジルの日系人に「あなたは日本人みたいね」と言われたこともありました。今思い起こしてみると、父もそのようでもとてもまじめな人なのです。私の知らないところで日本人的なものが受け継がれていることに大変驚きました。幼い頃になんとなく日本語を学んでみたいと思った気持も、おそらく心のどこかで祖父を意識していたのでしょうか。

ボリビア人である私が見た日本の姿でとても印象的だったのは、日本人はとても働き者であるということです。埼玉県でホームステイをした時の受け入れ先のお父さんや私の先生方は夜遅くまで仕事をしていました。公園でお父さんたちが子供と遊んでいる姿を見かけたことはありませんでした。日本は物質的に恵まれているけれども、家族間における絆が薄いように見え、淋しく思いました。

しかし日本にはボリビアにない良さがたくさんあります。交通も時間に正確で遠くまで行くことができ、とても便利です。人々は良い教育を受けて、正直です。私のいう教育とは学校教育に限りません。例えば、財布を道で拾ってもそのまま、つまりお金の入ったまま交番へ届けるといったことです。ボリビアでは残念ながら、財布のみが届けられることが多いのです。

日本に行く前、私はリベラルタで日本語教師の助手として働きましたが、これからはそれ以上に正確な日本語を教え、日本での体験も含めて日本の文化や生活を伝えたいと思います。さらに日本の良い点も伝えたいと思います。例えば、時間に正確であること、人々が正直であること、年上の人を敬うことなどです。また同じ品物でも質の良いものをつくることや日本人が実行しているリサイクルの大切さも、ボリビアの人たちに伝えたいと思います。そして私はこれからも自分の研究課題である森林学や地域開発学の勉強に力を入れて、日本で学んだことをボリビアの人々に伝え、ボリビアをより良い国に築いていきたいと思っています。

(『日本人移住100周年誌 -ボリビアに生きる-』)

宮坂さんからヤスカラさんへ

私は、1998年から1991年の2年間、青年海外協力隊の一員として、南米ボリビアのリベラルタで活動していました。その当時、私は「リベラルタ総合病院 (Hospital General de Riberalta)」で栄養士をしており、病院のすぐ近くに林田 ヤスカラさんが所属していた Centro Cultural Boliviano Japones de Riberalta の建物がありました。ヤスカラさんとは、リベラルタで日本語教師をしていた協力隊員を通して知り合い友人になりました。当時、ヤスカラさんはまだ大学生で、日本語もあまり話せなかったように記憶しています。

帰国後、ヤスカラさんがJICAの研修生として（92年頃だったと思いますが）来日し、再会することが出来ました。その直後、私は上京し、東京の大学で3年間学びました。大学卒業後は長崎に戻り、高校の教員になりました。その間に、ヤスカラさんから1度だけ手紙をもらったのですが、私の方が仕事の忙しさにかまけ、きちんとした返事も出さず、いつの間にか音信が途絶えてしまったのです。

ヤスカラさんに最後に東京で会ってから、もう20年以上がたちました。彼女がどこで暮らしているのか、元気にしているのだろうか、ずっと心配していました。私のせいで音信が途絶えたことをとても後悔し、彼女に謝りたい思いでいっぱいでした。

先日、ふと思い立って「facebook」でヤスカラさんの名前を検索してみたのですが登録されておらず、再びyahooで検索したところ、貴社のホームページで彼女の文章と、元気な姿が掲載されているの拝見し、飛び上がるほど嬉しかったです。

ヤスカラさんが日本で苦勞したことや、リベラルタに戻り地域の発展に尽力していることを知り、正直とても驚きました。なぜなら、私が知っているヤスカラさんは、真面目だったけれど、とてもおっとりした人で、そのような野心や夢を抱いているとは思っていなかったからです。

もし、またヤスカラさんに会うことが出来たら、この20年の空白を埋められるようにいろいろな話をしたい。そして、音信が途絶えてしまい、日本で彼女が苦勞していたときに何の力にもなれなかったことを謝りたいです。

そして、もう2度と音信が途絶えることがないように、この友情を大切に守っていきたいと思っています。

BREVE HISTORIA DE LA INMIGRACIÓN JAPONESA A BOLIVIA

SOCIEDAD NIKKEI EN UN PAÍS MUY LEJANO, BOLIVIA

La sociedad nikkei radicada en Bolivia, país que se encuentra en el corazón de Sudamérica, celebró el 3 de junio de 1999, con gran pompa, el centenario de la migración. Estos años han representado una época de grandes cambios tanto en el Japón como en Bolivia.

Los inmigrantes que llegaron antes de la Segunda Guerra Mundial, se dividen claramente en dos grupos; los que entraron sin familias en la zona alta de Amazonas y construyeron la sociedad Nikkei mestiza en la región norte del país en la era de auge del caucho, a comienzos del Siglo XX y otros que se dedicaron al comercio en las ciudades altiplánicas de Los Andes, principalmente en La Paz.



RIBERALTA EN LA DÉCADA DE 1910

A comienzos de 1912, Keiichi ITO viajó desde Maldonado hasta Riberalta, Bolivia, bajando por el río Madre de Dios. De Maldonado hasta la frontera se demoraba un día en barco y desde allí 7 días más de viaje en barco para llegar a Riberalta. En 1910, Riberalta, al igual que Maldonado, estaba

en la cima de la prosperidad. Riberalta, la nueva tierra sobre las orillas del río Beni, con aproximadamente 1.000 familias, tenía mucha actividad comercial y estaba entusiasmada con el auge de las construcciones. Ito describe que ya en esta época vivían 80 japoneses en Riberalta.

Lo más interesante de la vida de estos japoneses en la ciudad de Riberalta, es el gran número de japoneses que se dedicaban a la agricultura en las riveras del río. Desde Riberalta a lo largo del río Beni hasta la parte más alta existían 15 estancias, 19 en la parte baja y también 12 sobre el río Madre de Dios, sumando en total 56 estancias de japoneses donde 148 personas se dedicaban a la agricultura.

Por otro lado , los japoneses que entraron a la zona del Amazonas en la época de auge del caucho, formaron Asociaciones Japonesas en Riberalta, Trinidad, Cachuela Esperanza, Cobija, Porvenir y Senta. Pero todas estas asociaciones desaparecieron y apenas queda partes de las actas de reuniones en Riberalta y Cobija. Actualmente, en Riberalta, Cobija, Trinidad, Guayaramerín y Rurrenabaque existen Asociaciones Japonesas, pero de estas asociaciones, solo la de Riberalta y Trinidad desarrollan actividades como institución.

私がリベラルタ移民について調べるきっかけとなったのはオキナワ移住地に行った事でした。飛交う日本語と沢山の移民資料に圧倒され、衝撃を受けました。

リベラルタの現状とあまりにかけ離れていて、何故今に至ったのか、知りたくなりました。

少ない資料から当時の事が少しずつ分かって来るに連れ、リベラルタにかけられた希望やそれを叶える為の途方もない苦勞が、涙ながらにお話を聞かせて下さった1世の方々からも窺えました。

上手く文章に出来なかったのがもどかしいですが、リベラルタ移民が残した辛苦の足跡が紛れも無くボリビア日本人移住の歴史の道に繋がっている事をより多くの方に知って頂ければ幸いです。